



Hiroshima City University Language Center

広島市立大学語学センター
Newsletter No.31 (2008.3.31)



山本雅先生、退官記念メッセージ

平成20年3月をもって、開学当初から14年間広島市立大学国際学部の教授を務められた、山本雅先生が退官されます。山本先生は語学センターの初代センター長であり、また英語教育の面においても多大な貢献をされました。語学センターでの先生の貢献を考えると、先生が退官されることは大変名残惜しいですが、先生が初期に築かれた語学センターの土台を、学生のみなさんにはますます活用してもらい、語学習得に役立ててほしいと思います。

目次：	
山本雅先生、退官メッセージ(1)・・・	1
山本雅先生、退官メッセージ(2)・・・	2
ミニコラム：	
芸術学部 加治屋先生・・・	2
ヒロシマ人宛書簡1・・・	3
社会人英語eラーニング実施・・・	4
TOEIC 団体受験報告・・・	4

初代語学センター長の仕事(その1)： 語学センターのたちあげ ——「物」を大切にするのではなく、「人」を大切に——

私は、平成6年4月(開学当初)から平成10年3月までの4年間(2期)、初代の語学センター長を務めた。国際学部は、語学機器を利用しての外国語教育を学生募集の一つの目玉商品にしていた。だから、語学センター長の仕事は、それなりに責任の重い仕事であった。もちろん私は、英語教育の専門家ではないから、結局語学教育の分野においては、なんら貢献はできなかった。しかし、それでも現在のパソコン約300台を常備する全国でも有数の語学センターに対して、それなりの貢献をしたと自負している。

その第一は、「ゲタ箱」の廃止である。その当時、語学センター内の各教室には小学校にあるような「ゲタ箱」が入りに設置してあり、学生たちは靴を脱ぎ、スリッパに履き替えることになっていた。私が最初にした仕事は、「ゲタ箱」の廃止である。当然のことながら、事務局から猛烈な反発があった。「それは市の当初の計画であるので変更できない」ということであった。私は、広島市内のどれくらいの類似の施設が「ゲタ箱」システムにしているか調べた。それを一覧表にして事務局に提出した。事務局は「ほりが出て、パソコンが故障したらどうするのか。高価な機器なのだ」と主張し続けた。私は、「機械の都合のいいようではなく、人間の都合のいいようにすべきだ」と主張し、廊下に張り紙を出して、「土足で可」と通達した。そうすると、事務局はそれをはがし、「スリッパに履き替えること」と通達した。しかし、私は語学センター長としての意志を通した。今、皆さんが土足で語学センターを利用できるのは、この時の私の半年に渡る事務局との奮闘の結果である。

第二の仕事は、語学センター長室の廃止である。私

は、そのような部屋を作るのは馬鹿げていると主張し、語学センター事務室は多くの教員や職員が自由に利用できる場所にするべきだと主張した。どうしたものか、これは語学センター長の一存で決定した。現在、昼休み時などに、教員や職員が語学センター事務室内で、弁当を食べたり、雑談しているのを見ると、私の考えの正しかったことが分かり愉快になる。語学センター1階のエレベーター向かいに、図書館案内板と語学センター案内板がある。その中に「語学センター長室」と印字してあることに注目して欲しい。私は語学センター長室を廃止したが、印字だけは今に残っている。

私の初代語学センター長としての奮闘は他にも種々あるが、続きは2ページの(その2)を読んで欲しい。私の一貫した主張は、「物を大切にするのではなく、人間を大切に」ということであった。人間を大切にしないで、何のための設備か。しかし、最近、私は自宅でパソコンを無茶苦茶に扱っていたら、ハードディスクが故障し、修理に5万円とられ、更にインストールに2万円とられ、おまけに蓄えていたデータは全て消えて、ペアになった。今は腫れ物に触るように大切にパソコンを扱っている。

(P.2へ続く)



国際学部教授
山本 雅



山本先生研究室にて
国際学部3年生の
専門演習の様子

初代語学センター長の仕事（その2）： 語学センターのたちあげ ——「物」を大切にすることではなく、「人」を大切に——

（その1）でも述べたが、広島市立大学の語学センターは全国でも有数の外国語教育の施設である。しかし、その最大の特徴は何かと問われた場合、何人が正確に答えられるであろうか。この語学センターの最大の特徴は、そこに所属する専任の教員が一人もいないことである。つまり、本学の語学センターは、「箱」だけが存在している。周知のとおり、広島大学には「外国語教育センター」が平成16年に設置された。そしてここには、現在十数名のセンター専属の教員が配置されている。教員は「センター所属」である。

今仮に上記のシステムを「広大方式」（日本の殆どの語学センターはこの方式である）と呼ぶと、私たち（松村幹男先生、藤本黎時先生、それに山本の3名：いずれも広島市立大学設立準備委員）は、当初からこの方式に反対であった。特に私は、「広大方式」であった場合には、市立大学には移籍しないつもりであった。そこまで覚悟を決めていた。「広大方式」は、語学センターという「物」と「組織」を重視したものであり、中にいる「人」を重視したものではありません。この中にいる教員は、主に一般教育の英語の担当であり、ゼミの担当もできなければ、卒論の指導もできない。ましてや、大学院において講座の主任教授にもなることはできな

い。私たちは上記のことを設立準備委員会で強く主張した結果、市立大学の語学センターは現在のような「変則的な」形態になっているのである。私はこのような特殊な形態を認めてくれた市当局には今も感謝している。しかし、国際学部の設立から14年たった今、語学センター棟にいる合計8人の先生方がいかに、ゼミや卒論指導、大学院生の指導に縦横無尽に活躍しているかを見れば、あ那时的私たちの考え方がいかに正しかったか分かるであろう。特に、語学センターのコンピューターを利用しての英語教育や社会人のための生涯学習プログラムは全国的に注目されている。いかに「物」や「組織」を作ろうとも、その中の「人」が大切にされ、中にいる人が希望や意欲をもって教育・研究に携わるのでなかったら、大きな力は発揮できない。やはり大切なのは「人」である。初代語学センター長として、また「英語グループ」の世話係、またその後の教務委員長として、私が尽力した語学センターのための路線は間違っていないと確信している。



山本先生のご著書
ホーソンに関する研究書 他

ミニコラム 外国語に想う【26】

芸術学部 デザイン工芸学科
准教授 加治屋健司

「言語の共同体としてのアメリカ」



スミソニアン(SAAM)
の研究者時代

現在メディアを賑わせているアメリカの民主党の大統領候補指名争いを見ていると、4年前の大統領選挙のことを思い出す。

2004年の秋頃だったと思う。当時私はニューヨークの大学院で美術史を学んでおり、理論的な関心を持つ同級生たちと読書会を開いて、哲学や思想の文献を読みあさっていた。一度、ある友人の家で開いたときは、課題の本についてひとしきり話した後、持ち寄ったワインを飲みながらアメリカの選挙制度について延々と話し合った。そのときすでに、バラク・オバマは、夏の民主党大会で行った名演説で全国的に有名になっており、私も、当時民主党のサイトで公開されていた動画を繰り返し見ては感銘を受けていた。私の友人は熱心な民主党員で、家には「ケリー&エドワーズ」のバッジやステッカーが山積みになっていたが、彼らが政治について明確かつ適切に語ろうとする姿勢に、オバマのスピーチにも共通する、言葉に対する深い理解と信頼を私は感じた。このとき、アメリカ人がいかに言葉を大切にしているかということ

身をもって知ったのである。

アメリカの英語を習得するということは、言語に対するこのリスペクトを感覚として身につけるということだと私は思う。言葉に対する想いに裏打ちされた演説や講演を聞くことで、私自身、このリスペクトの感覚を研ぎ澄ませていった。オバマ以外だと、アップル社CEOのスティーヴ・ジョブズも優れた演説家で、とりわけ2005年のスタンフォード大学の卒業式で行ったスピーチは、先人の言葉に対するジョブズの熱い思いで締めくくられた素晴らしいものである。

広島市立大学の語学センターには優れた外国語教材が数多くある。学生の皆さんも、それらを活かして外国語の上達に役立ててほしいと思う。

ヒロシマ人宛書簡1

生の中の死、または死の中の生としてのヒロシマ（上）

Aよ、ヒロシマの課題に挑もうとする君に僕は、関連書、批判書も含みこんで、歴史的で基礎的な、一冊のヒロシマ文献の読破を勧め、紹介する。

ロバート・J・リフトンの『死の内の生命（原著 Death in Life 生の中の死）』朝日新聞社1971年）。

リフトン（1926年、ニューヨーク生まれ）は精神医学・心理学者。極限状況体験者の調査研究をする。『思想改造の心理——中国における洗脳の研究』、『日本人の死生観』（加藤周一らと共著、岩波新書。乃木希典、森鷗外、三島由紀夫ら6人を扱う）、『アメリカの中のヒロシマ』

（トルーマンの原爆投下決定、スミソニアン「原爆展」中止の論争など）、『終末と救済の幻想——オウム真理教とは何か』（人類存続に脅威である狂信的集団のテロリズム問題分析）などの著作がある。いずれも学術書ではあるのだけれど概して読みやすい。それにはテ



ゴヤ《砂に埋もれる犬》1820-23年、プラド美術館蔵、(部分)

マが同時代の切実な関心を呼びよせるものだからでもある。

原爆によって引き起された事態の歴史的・心理的研究が『死の内の生命』である。1962年5月から9月半ばまで広島で73人の被爆者と個人面接し、その生の聞きとり調査を基に分析、検討、解釈の操作を経て論述したもの。大部の著作であって多面的総合的な問題把握がなされている。

内容をしいて次の3項に類別してみよう。①原爆症としての心理的障害の指摘、②被爆者はどう生きたか、救済・生活・社会条件、③被爆者はどう作品表現されたか。

①は医学の問題。中澤正夫『ヒバクシャの心の傷を追って』岩波07年、によって説明すれば、リフトンは「死の呪縛」「罪の同心円」「精神的麻痺」のカテゴリーをたてて、被爆者の内面の悩み痛み苦しみを構造的に捉えて概念化、言語化した。ABCCも日本の調査団も精神医学、心理学の部門をもっていなかった。放射能による身体疾患である「ぶらぶら病」

が定着することで、かえって被爆者の心の傷の発見が遅れた。リフトンは、感情機能を停止させる急性なサイキック・クロージック・オフ（心理的閉めだし）、慢性的なサイキック・ナミング（精神的麻痺）を示した。

1980年以降、ベトナム帰還兵に大量発生した精神症からPTSD（心的外傷後ストレス障害）研究が発展する。リフトンはじめ米国精神科医が政府に働きかけたという。

ところでPTSD一般症例は時とともに薄れるが被爆者

の場合は薄れず遷延し今なお遅発性発症がみられるという。「トラウマに追われ続け消えない、加重するのは原爆体験以外にはない」。「放射能による後障害やその恐れが次々と、新たなる心的外傷を形成するからである。『放射能が一生追いかけてくる』のである。そこに原子爆弾の悪魔性がある」（中澤正夫）。

②先の「罪の同心円」と

は「生者は死者に、軽症者は重傷者に、入市被爆者は直爆者に対し」、そして非被爆者が被爆者に、申しわけのなさ、罪の意識を抱くことをいう。死にとらわれた「生存者」はデス・イン・ライフ（「生ける屍」とも訳しうる）であるか。リフトン批判はここに起る。秋葉忠利『真珠と桜』朝日新聞社86年、また『人間の心ヒロシマの心』三友社出版88年の舟橋喜恵発言を参照のこと。りっぱな希望を持った、尊敬できる被爆者の歩みがある以上、リフトンの60年代レベルに留まるわけにはいかない。だが同時に本書の被爆者のナマの声と実態、リフトンの観察と解釈は刺激的で、忘れやすい現代においては新事実のようにむしろ新鮮。

87年のリフトン発言の「人を動かす力のあるテキストが皆そうであるように、ヒロシマも、それぞれの真実を探し求める世代ごとに、読まれ、吸収され、再形成されなければならない」に異存はない。賛成。（この稿つづく。4/19～4/25シネツイン『ヒロシマ・モナムール』見ておいて。）

（小老犬知）

語学センター初！！ 社会人 学び直し英語eラーニング講座

初となる語学センターでの社会人英語学び直し講座が、2月27日～3月28日の間、404教室で行われました。この講座は前号のニューズレターでも紹介したように、今年度の11月から始まった「社会人の学び直しeラーニング講座」の一環です。このプログラムは主に公民館で行われていますが、今回初めて語学センターも会場となりました。第1回目となる今回は23名の社会人の方が参加されました。



語学センター 404教室
社会人受講の様子

社会人受講者による英語学習体験談



小田健司さん

市立大学での学び直し講座を受講したきっかけは、以前に青木先生が開発した英語の学習プログラムの新聞記事を目にしたことでした。この春に市立大学の語学センターでプログラムが開講されると知り、市立大学の国際学部にも興味があったことから、市立大学での受講を希望しました。このプログラムからは、英語のスキルアップはもちろんですが、英語を生徒にいかにか教えるかという、教えるスキルも身につけていきたいと思っています。また、このプログラムはパソコンに向かって学習するため、時間が自分の好きなように使え、自分に合ったやり方で勉強できることが魅力的です。



光井美加さん

子どもが勉強しているのを見て、自分も何か勉強をしたいと思っていました。そのとき、「市民と市政」で英語の学び直し講座の募集を見て、受講することに決めました。元々、英語は好きで特に英会話が好きでしたが、文法と単語が弱いのでその部分を強化したいです。普段は、家庭と仕事という生活なので、大学で英語の講座を受け、勉強できるということは、とても楽しくやりがいがあります。また次の講座が開催されるのを楽しみにしています。



TOEIC団体受験実施状況

語学センターでは、毎年TOEICの団体受験が行われています。今年度は計23回の団体受験が行われ、約2500人が受験しました。受験者は、学生だけでなく、袋町の市民交流プラザでの英語学習プログラムの受講生、今年の10月から開始した公民館での学び直しプログラムの受講生もいます。

来年度からは、自習型英語学習プログラムである「CALL 英語集中」が国際学部・情報科学部の2年生も必修となるため、さらにTOEIC団体受験の受験者が増えることは必須です。また、英語集中受講者以外の学生も、一般の団体受験として受験することができるので、来年度も英語力の向上の一目標として積極的に受験をしてみましょう。(一般学生の団体受験希望者は、語学センター英語インテンシブプログラムカウンターに問い合わせてください。)

[TOEIC団体受験実施状況]

- 2007年4月5日(月)～4月6日(火)
- 2007年4月20日(金)
- 2007年7月9日(月)～7月11日(水)
- 2007年9月13日(木)
- 2007年9月28日(金)
- 2007年10月9日(火)～10月10日(水)
- 2007年11月11日(日)～11月12日(月)
- 2007年12月17日(月)～12月19日(水)
- 2008年1月21日(月)～1月22日(火)
- 2008年1月27日(日)～1月28日(月)
- 2008年2月24日(日)
- 2008年2月26日(火)
- 2008年3月30日(日)～3月31日(月)

〇 掲示板

2008年度からNHKラジオ、テレビ講座の新しい講座を定期講読します。語学力のブラッシュアップには是非役立ててください。

[新定期講読雑誌—英語]

〇NHKラジオ

チャロの英語実力講座、英語基礎3、入門ビジネス英語実践ビジネス英語、英語ものしり倶楽部

〇NHKテレビ

リトル・チャローからだにしみこむ英会話—



発行日
発行

2008年3月31日
広島市立大学語学センター
〒731-3194
広島市安佐南区大塚東3-4-1

編集

堀本真由美
伊達美和子(内線:6410)

Phone

(082)830-1509

Fax

(082)830-1794

E-mail

lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp

ホームページ

<http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html>

